

第六部 インマヌエルの書 ③

□第六部のアウトライン C)、D)、E) はイザヤ親子の名と関連する預言 (8:18)

A) インマヌエルのしるし (処女から生まれる) 7:1~25

B) インマヌエルについての4つの預言 8:1~9:7

C) 神の伸ばされた御手 9:8~10:4

(神がアッシリアを用いて北イスラエルを裁く)

D) アッシリアに対する裁き 10:5~34

(レムナントについての預言を含む)

E) インマヌエルによる統治 11:1~12:6

次男マヘル・シャラル・ハシュ・バズ

【分捕り物はすばやく、獲物はさっと】

長男シェアル・ヤシュブ

【残りの者が帰って来る】

父親イザヤ 【主は救い】

注意：この預言の中で、北イスラエルは、「エフライム」とも呼ばれる。

北イスラエル・・・エフライム族はじめ十部族、その首都はサマリア。王は有力者交替

南ユダ・・・・ユダ族とベニヤミン族、その首都はエルサレム。王はダビデの家系

□C) 神の伸ばされた御手 のアウトライン (イザヤ9:8~10:4)

神がアッシリアを用いて、北イスラエルを裁く

1. 裁きの第一弾 北イスラエルは高ぶるも、外敵に食われる (9:8~12)
2. 裁きの第二弾 亡国の責任は指導者層に。彼らが頼みとする北イスラエルの兵力が一日のうちに壊滅的打撃を受ける (9:13~17)
3. 裁きの第三弾 内戦と混乱。無政府状態に陥って荒廃する (9:18~21)
4. 裁きの第四弾 アッシリアによってついに滅亡する。指導者たちの哀れな姿 (10:1~4)

C) 神の伸ばされた御手 9:8~10:4

1. 裁きの第一弾 北イスラエルは高ぶるも、外敵に食われる (9:8~12)

8節 主はヤコブに一つのことばを送られる。それはイスラエルに下る。

9~10節 この民、エフライムとサマリアに住む者たちはみな、それを知り、高ぶり、思い上がって言う。「れんがが落ちたから、切り石で立て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」

➤ エフライムとサマリアに住む者たち・・・北王国イスラエルの人々

- それを知り、高ぶり・・・主のことばを聞いて、高ぶって言う
- れんがが落ちた、いちじく桑の木が切り倒された・・・外敵の攻撃を受けて、建物や国土の一部が損害を被ることがあったとしても。
- 切り石で立て直そう、杉の木でこれに代えよう・・・戦災前よりも良い建材で立て直そう、高価な杉を産地から買えばいい。自分たちは大丈夫だという慢心と高ぶり。

11～12 節 a それで主は、レツインに敵対する者たちをのし上がらせ、その敵たちをあおりたてる。東からはアラムが、西からはペリシテ人が、その口いっぱいイスラエルを食らう。

- 3つの外敵がイスラエルを攻撃する
 - レツインに敵対する者たち・・・同盟国アラムの王レツインに敵対する者たち＝アッシリア。アッシリアがのし上がるのは、神がそのようにされたから。実際、アッシリアは困難な戦闘を経験せずに、台頭した。
 - 東（前方）からはアラム。アラムはアッシリアに屈してその属国となる。北イスラエルとの同盟は破棄されて、アラムも敵に回る。
 - 西（後方）からはペリシテ人
- ペリシテ人が攻撃したのは、南王国ユダ（Ⅱ歴 28：18）。よって、12 節の「イスラエルを食らう」のイスラエルには、北だけではなく、南も含まれる。イスラエル民族全体を指している。南王国ユダの王アハズは、ペリシテ人の侵入を受けたとき、主に頼らず、アッシリアを頼りにしていた。

12 節 b それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

- なおも御手は伸ばされている・・・神のさばきはこれで終わりではない

2. 裁きの第二弾 亡国の責任は指導者層に。彼らが頼みとする北イスラエルの兵力が一日のうちに壊滅的打撃を受ける（9：13～17）

13 節 しかし、この民は自分を打った方に帰らず、万軍の主を求めない。

- 裁きの第一弾で北イスラエルは高ぶりを悔い改めなかった。

14～17 節 a そこで主はイスラエルから、かしらも尾も、なつめ椰子の葉も葦も、一日のうちに断ち切られる。そのかしらとは長老と身分の高い者。その尾とは偽りを教える預言者。この民を導く者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は惑わされる者となる。それゆえ、主はその若い男たちを喜ばず、そのみなしごも、やもめも、

あわれまない。皆が神を敬わず、悪を行い、すべての口が愚かなことを語っているからだ。

- 亡国の責任は「かしら」、指導者たちにある。そのことは、5章「主のぶどう畑」でも中心メッセージであった。
- かしらも尾も・・・指導者たちとその追随者たち（特に、偽預言者）
- なつめ椰子の葉も葦も・・・最も背の高い植物も最も低い植物も＝北イスラエルの上層部も下層部も
- 主はその若い男たちを喜ばず・・・北イスラエル軍を構成する若い兵士たちが一日のうちに大勢戦死する。その結果、みなしごと、やもめが大量に生じる。モーセの律法では、みなしごとやもめは保護されるべきであるが、北イスラエルの人々は彼らに憐れみを向けない。
- 預言の成就・・・Ⅱ列 15：29

17節 b それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

3. 裁きの第三弾 内戦と混乱。無政府状態に陥って荒廃する（9：18～21）

18節 まことに、悪は火のように燃えさかり、茨とおどろをなめ尽くし、林の茂みに燃えついて、煙となって巻き上がる。

- 悪・・・ヘブル語の意味は「反乱」。ここでは、神への反乱を指す。北イスラエルの指導者層が神に背き、神への反乱を続けてきた。それは、北イスラエルの民の心も内側から破壊する、それが次の表現に続く。
- 茨とおどろをなめ尽くし・・・イスラエルの民衆の心までも、神への反乱状態になる。

19節 万軍の主の激しい怒りによって地は焼かれ、民は火の餌食によりになり、だれも互いにいたわり合わない。

- 民は火の餌食となり・・・火とは外からの火、外敵の攻撃を指す。国が無政府状態になるからである。

20節 右にかぶりついても、なお飢え、左に食らいついても、満たされず、それぞれ自分の腕の肉を食らう。

- 飢饉の状況に陥る

21節 a マナセはエフライムを、エフライムはマナセを、そして彼らはともにユダを敵とする。

- マナセとエフライムは、北イスラエルを構成する主要な部族。もとはヨセフ族という同一部族。それらが互いに対立するというのは、内戦状態に陥るということ。そして両者とも、南王国ユダと敵対する。

21節 b それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

5. 裁きの第四弾 アッシリアによってついに滅亡する。指導者たちの哀れな姿（10：1～4）

1～2節 わざわいだ。不義の掟を制定する者、不当な判決を書いている者たち。彼らは弱い者の訴えを退け、私の民のうちの貧しい者の権利をかすめる。こうして、やもめは彼らの餌食となり、みなしごたちは奪い取られる。

- 裁判で不当な判決を出してきた指導者たちに対する裁きの宣告。モーセの律法ではやもめやみなしごは特に保護するように命じられていたにもかかわらず、指導者たちは弱い者、貧しい者を虐げ、搾取してきた。

3節 訪れの日、遠くから嵐が来るときに、あなたがたはどうするのか。だれに助けを求めて逃げ、どこに自分の栄光を残すのか。

- 遠くから嵐が来る・・・アッシリアが攻めてくる
- あなたがたはどうするのか・・・不正で得た富など役に立たない
- だれに助けを求めて逃げるのか・・・本来であれば、同じ民族である南王国ユダに逃げるのに、それができない。これまで北王国イスラエルは、アラムといっしょになって、南王国ユダを攻撃してきたからである。
- どこに自分の栄光を残すのか・・・どこに自分の富や榮譽を持って逃げて隠れるのか、どこにもない。

4節 a ただ、捕らわれ人の足もとに膝をつき、殺された者たちのそばに倒れるだけだ。

- 指導者たちは、侵略者アッシリアから逃れることはできない。捕囚となって引かれていく集団の中でふらふらとなり膝をついて歩けなくなるか、それとも、殺された者たちの死体の山のそばに倒れ込んで死人のふりをするだけである。（預言の成就 II列 17：5～6）

4節 b それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

- 神のさばきは、次はアッシリアに向けられる。アッシリアは神の力によって台頭できたのに、自分の力で成し遂げたと高ぶった。第六部 D) へ。